

安倍能成

ケ―ベル先生と

夏目先生その他

ケーベル先生と

夏目先生その他

「小品集」の中の「ケーベル先生」は確かに夏目先生の小品中の傑作である。私は夏目先生と一緒にケーベル先生のこの静かな、質素な夕食に招かれたので、この文章にはとりわけ思出の深いものがある。

ケーベル先生は夏目先生の先生であって、又私達の先生でもあった。両先生共人間の純真さという点では特に相通じていた。そうして両先生共に人間の心の観察者として勝^{すぐ}れていた。そうして自分達がそうである如く他の

人々に対しても何よりもその純真を重んじ、純真を発見するに敏感であつた。そうして学問とか位置とかの遮蔽物に妨げられることなく、この人間にとって一番貴いものを貴ぶことを知っていた。両先生はこの点に於てその教養や学識を別にしても互いに相愛し相敬していられた。両先生は非常に親しい間柄ではなかつたが、しかしこの点に於て両先生の間には美わしい感情の往来があつたことを私は明かに認め得た。

明治四十四年の七月にケーベル先生を尋ねた時には、私は牛込東五軒町に住んでいたので、夏目先生はその夕

早稲田南町から私の寓^{ぐう}へ誘いに来て下さった。そうして
帰りに夏目先生と一緒に「大きな暗い夜」の中を抜けて、
ぱっと明るい神楽坂の雑踏の中へ出た。夏の夜の浴衣が
けに白く化粧した女の群が、ケーベル先生の食卓の側と
は著しいコントラストを以て私の前に現われた。私はそ
の時日本の女が非常に肉感的な様な感じがして、夏目先
生に西洋の女もこんなにセンシユアルですか、と聞いた
所が、先生は「イギリスの女などはそうでないね」とい
われた。先生が生きていられて大戦後のヨーロッパを見
られたり、銀座通りのモダンガールを見られたりした

ら、どういわれるだろうか。それは私には分からない。

東五軒町の家では思出が今一つある。先生の胃のわるかった時、家のものが何とかいうプジングを造って御見舞に持っていていったところが、病気が直ってから、先生は散歩かたがたその時分ホトトギス社で受売していた丹波の西山泊雲醸造の「小鼓」の一升瓶をさげて持って来て下さったことがあった。

ケーベル先生がいよいよ愈立つことになった大正三年の七月十五日に夕食に先生の招待せられた時にも私は一緒であった。その時にはたしか京都の深田さんも卓を共にせら

れた。両方の場合とも先生の家人で私の親友である久保勉君は固より同じ食卓に列した。しかしヨーロッパへ立つ筈になっていたケーベル先生をそれから九年の後まで日本に止めて^{とど}めた日本の土とした運命は、ケーベル先生に比べては十五、六歳も若い先生を翌々年の末にこの世から奪い去った。

私は近頃大連や旅順や奉天を始めて見たので、先生の「満韓ところどころ」を久しぶりに読んで見る気になった。これもある意味で先生の傑作である。先生の軽快なおしゃべり、楽天的な呑気な、そうして都会人らしい洒

落さはこの中によく現われている。私は自分などの監察と比べて見て、先生のおんなに面白く、巧みなそうして細かな監察と文章とに今更の如く感心した。しかし先生がこの旅行中にも到る処に胃のなやみのことが書かれている。この時の無理などが重なり重なって、翌明治四十四三年夏の大患を誘致したものであろう。私はあの時はちやうど沼津の知人の所に居合わせて、電報を受取った朝の一番で修善寺へかけつけた。千本松原から沼津駅までの途中無我夢中にかけて抜けた遊郭の軒灯はまだ影が明あかった。東海道線の三島駅から豆相線の三島駅までの途

中は、家という家は殆どまだ戸を明けていなかった。私
 が修善寺の先生の宿に著いたのは十時頃であつたらう
 か。私は報を得て来著らいちやくした者の第一人であつた。

先生のこの大患の追憶である「思い出す事など」は「満
 韓ところどころ」とは又違つて、先生の遺品の中でも一
 番しみじみしたものである。私は今度新しく出来る「小
 品集」を朝鮮へ送つてもらつて、静かに当時の思い出を
 先生と共に繰返したい。

(昭和三年四月十六日夜 東京にて)

(『漱石全集』(昭和三年版) 月報第三号(昭和三年五月))

日本文学電子図書館

ケーベル先生と夏目先生その他

著 者：安倍能成

制作者：宮澤一郎

底 本：「漱石追想」

岩波文庫、岩波書店

2016年3月25日 第1刷発行

日本文学電子図書館